

Michel Figeac, *L'automne des gentilshommes; noblesse d'Aquitaine, noblesse française au Siècle des Lumières*

Honoré Champion, 2002, 377 pp.

森村敏己(一橋大学)

1960年代までの貴族像、すなわち封建的土地所有にしがみついた寄生的階級、時代の変化に対応できず台頭するブルジョワによって表舞台から追放される反動的な存在といった理解は今では完全に過去のものになった。しかし、その一方でこうしたイメージの打破に貢献した Guy Chaussinand-Nogaret が主張する貴族像は、自由主義的で先進的な側面を強調しすぎており、貴族研究が大きく進展した現在では再検討する必要がある。著者はこうした立場から18世紀のフランス貴族の実像に迫ろうとする。その際、著者は自らがフィールドとするアキテーヌ地方だけでなく、他の地方を対象とした研究を広く参照することでフランス全体に及ぶ見取り図を描き出している。

Chaussinand-Nogaret が一方に傾けすぎた振り子を適切な位置に戻すため著者が強調するのは貴族の多様性である。つまりどの尺度を取っても貴族とは多様な存在であり、単一の団体と見することは到底不可能なのだから、この意味で古い貴族イメージも革新的貴族イメージも共に偏っ

たものだというのが、多くの研究蓄積に依拠しながら貴族の多様性を論証していく著者の議論は説得的である。貴族身分を手に入れた時期、商工業への態度、婚姻戦略を含む人的ネットワーク、財政基盤、ライフスタイル、蔵書の構成、啓蒙思想との距離、社会的ステータス、農業改革への熱意、政治的態度など、どの側面においても貴族は確かに多様な存在であり、単一の身分としての実質を欠いている。

ただし、著者の目的は新しい貴族像の全面的な否定ではない。1960年代までの貴族イメージと新しい貴族イメージとを並べたとき、著者のシンパシーは明らかに後者に向けられている。このことは以下の点において明らかだろう。

まず、「領主的反動」は否定され、その実態は、より効率的・近代的に領地を經營しようとする貴族の努力と共同体の慣行との対立であったとされる。もちろん近代的な領地經營を行う貴族はごく一部ではあったが、ほとんどの貴族は土地からの収益の増加、領地の範囲の確定に熱心であり、それが農民の反発を招いた原因である。また、領主の經營努力によって封建的権利に由来する農民への負担が増したわけではないという。

次に貴族は寄生的で怠惰な階級ではないとする見解は一貫している。この点は貧乏貴族においても変わらない。全体的な傾向として貴族の貧困化の主要な要因は貴族的相続の在り方にあり、家を維持するため長子が財産の大半を独占する状況では次子以下の貧困化は避けられないが、彼らもいたずらに没落を待っていたわけではない。ブルターニュやマルセイユの貴族のように商業に乗り出さなくても、軍人を目指す、植民地に渡る、そして何より、わずかな土地からの収益を少しでも増加させようと努力することで貧乏貴族は没落に抵抗していた。もちろん、それでも没落する貴族は多いが、その原因を怠惰に求めることはできない。

第三に貴族は閉鎖的カーストではないという主張が繰り返される。貴族になった時期や貴族人口の推移から見て、18世紀はむしろ新興貴族の増加が顕著な時代であり、現にボルドーの貴族に関しては租税法院や財務局がネゴシアンをはじめとする富裕なブルジョワが貴族に上昇する窓口として十分に機能していた。また、士官になる条件を三代以上続いた貴族に限るとした18世紀後半の軍制改革も貴族の閉鎖性ではなく、血統貴族と新興貴族という貴族内部の対立から説明される。同様に、評定官になるために類似の条件を課した高等法院の決定についても、それは評定官内部の派閥対立の結果であり、実際にはその後もブルジョワは評定官になったとされ、ここでも貴族の閉鎖性は否定される。

1970年代に生じた貴族像の転換以後の研究を幅広く参照・整理しているだけでなく、貴族の私文書調査が重要であること、富裕な貴族に比べて貧乏貴族、法服貴族に比べて帯剣貴族の研究が遅れていること、ヨーロッパの他の国の貴族との比較研究が求められることなど、著者は今後の課題も指摘しており、本書は貴族研究の現状を知る上で極めて有用である。ただし、もっぱら「多様性」という観点から貴族を描くことには若干の違和感を覚える。もちろん実態としての貴族が多様な存在であったことに疑問の余地はない。この点での著者の議論には十分な説得力がある。しかし、実態とは別に、「貴族とは単一の身分である」または「単一の身分たるべきである」とするイデオロギーが果たした役割に対して著者の関心は薄いように見える。たとえ「実態」から乖離しているように思われる「言説」であっても、それが貴族の価値観や行動に影響する可能性は軽視できない。ブーランヴィリエやシュヴァリエ・ダルクの作品は一部の田舎貴族の心を描き出ただけだと著者は断じるが、もう少し慎重であってもいいのではないかと印象を受けた。